書下ろし／長編小説

青山物語1971

清水義範

KAPPA NOVELS HARD 創刊

全力書下ろし！

冴えなくてオカシイ

青春まっ只中

著者の自伝的青春珠玉作

最新刊・光

清水義範

書下ろし長篇小説

青山物語 1971

KAPPA NOVELS
HARD

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、最近、「カッパ・ノベルスハード」にかぎらず、どんな小説を読まれたでしょうか。また、今後、どんな小説をお読みになりたいでしょうか。読みたい作家の名前もお書きくわえいただけませんか。

どの本にも一字でも誤植がないようつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（〒112－11）
光文社　出版局

長編小説
青山物語 1971
一九九二年　六月一〇日　初版一刷発行

著　者　清水義範
発行者　大坪昌夫
発行所　株式会社　光文社
東京都文京区音羽二－一二－一三
電話　東京（〇三）三九四二－二二四一（代）
振替　東京六－一一五三四七
印刷所　大日本印刷
製本所　大日本印刷

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。　© Yoshinori Shimizu　1992
ISBN 4-334-02985-X　Printed in Japan

日本音楽著作権協会許諾番号　第9270291－201号

© 1963 by EDITIONS MUSICALES RUDO BELGIUM
Rights for Japan controlled by TOSHIBA-EMI
MUSIC PUBLISHING CO., LTD.

目次

第一章　四月　5
第二章　初仕事　41
第三章　梅雨　77
第四章　夏　115
第五章　秋　151
第六章　冬　187
あとがき　224

装丁　安彦勝博
装画　古橋恭子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

青山物語 1971

第一章　四月

1

『アンアン』のページをめくると、カラー・グラビア・ページのミニスカートのモデルが、ぽっくりのように底の厚いサンダルをはいていたという時代の話である。コルク製の靴底の高さが七、八センチはあった。

昭和四十六年。一九七一年のことだ。

大田区上池台という、東急池上線長原駅から歩いて五分のところにある、四畳半一間の下宿の部屋を出発した平岡義彦は、池上線で五反田へ出た。そこでまだJRにはなっていない、国鉄山手線に乗り替え、渋谷まで。

九時をまわっているから、そんなにひどいラッシュではない。そのことは、社会人一年生の義彦にとって幸運なことであった。勤めた会社が十時始業という、ゆるい労働時間のところだったのである。

渋谷から、地下鉄銀座線に乗る。ひとつめの駅が「神宮前」（今の「表参道」）ふたつめが「外苑前」である。その外苑前で降りて地上へ出る。

出た大通りが国道246、そのあたりでは青山通りと呼ばれているものである。道の北側が、港区北青山で、南側が南青山。そんな地名は今も昔も変わらないか。

しかし、平岡義彦が降り立った青山と、今の青山とでは大いに違っていることもある。駅から、青山通りを赤坂見附方面に、道の左側を進む。するとすぐ、やけに古ぼけた三階建てのビルが道に面して建っていた。雨のしみがこびりついてとれないような、お化けでも出そうなビルである。

それが、青山電話局であった。

そう。現在のそのあたりを知っている人は言うであろう。今もそこに、NTTのビルがあるぞ、と。

今の高層ビルに建て替わる前の、古い電話局ビルがあそこにはあったのである。位置的には、今のNTTビルの前の広場のようなところにだが。

そして、その電話局ビルの周辺は、ごみごみとした薄ぎたない住宅街だった。道に面して建ってる家ですら、ほとんど木造の二階建てだったが、区画整理の話が進められているのか、人の住む気配のないのが多かった。そんな中に、ガラス張りの喫茶店がやっとひとつあるくらいで。その喫茶店の少し先に、やぶ、というそば屋があった。

表通りから一本中に入れば、まさしくこぎたない住宅街である。道がそもそも、家と家の間の、ぬけられます的路地の感じだ。そういう路地の一部分は、地道だったのだよ。舗装がしてなかったのだ。信じられますか。

そしてごみごみと、小さな家や、安っぽいアパートが建っていた。中に三階建てアパートなん

かがあると、場所柄からか、偉そうにナントカ・マンションという名がついていたりした。

義彦は電話局ビルの前をすぎると、喫茶店のところまでは行かず、その手前で左に折れる路地に入った。喫茶店のあったところあたりは間もなく、ハザマビルというものになる運命である。そば屋のやぶのあたりが、後に伊藤忠本社のビルになる。

というわけで、義彦が曲がって、やがて行きついた、彼の勤める会社のあるマンションは、今で言うとNTTのビルの裏あたりである。

マンションと言っても、そう、さっきも言ったような次第であるから、鉄骨モルタル造りの三階建てマンションである。一フロアが一軒で、それが二LDKしかなかったというのだから、その小ささがわかるであろう。

その、パール・マンションの鉄製の外階段を、ゴンゴンと音を立てて登っていき、三階に達してそこにあるドアを開ければ、そこが彼の勤めることになった会社、株式会社フィールドであった。

靴を脱いであがると最初にあるのが、十二畳くらいの板張りのリビングルームである。その部屋の三つのコーナーに安っぽいスチール事務机が置いてあった。そして中央には、偽レザー張りの応接ソファ・セットがでんと据えられていた。

リビングルームのイメージ・カラーは黒であった。手造りらしい棚家具が、真っ黒に塗られていて、その棚に、漁師からもらってきたような、ガラス製のブイの玉のようなものが飾ってある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

そして、その部屋でもっと目立つのは、間仕切り代わりに壁際に立てられている、巨大な写真パネルであった。

ロック・ミュージシャンを写したやけに暗いモノクロ写真。それを、畳大のパネル六枚に引き伸ばしたと考えてもらえばいい。そういうパネルを壁の飾りに立てているわけだ。

なぜそんなパネルがあるのかを簡単に説明しておこう。フィールドの社長越川直人（こしかわなおと）は一年前に脱サラして独立したのだが、それ以前は広告代理店に勤めていた。その、広告屋時代に、ポスター撮影の背景として、そのパネルを製作したのだ。そして、用済みになってから、これカッコいいからもらおう、ということにした。そんな次第である。

パネルのことなどどうでもいいのについ説明してしまったのは、それがあるせいで、そのオフィスがなんとなくアングラっぽい（出た！　懐かしのキーワード）ムードになっていたと思ってほしいのである。アングラっぽいということは、一九七一年においては、ナウくて東京的だ、ということであった。

パネルの一枚の、床から一メートルほどの高さのところに、壁かけ式の電話が取りつけてある。そしてその周囲のパネルの、白っぽい部分にはフェルトペンで電話番号などのメモが乱雑に書きなぐってある、という具合だった。そういうところも、会社らしくなくてアヤシゲなムードなのだった。

リビングルームの奥に、振り分け式に二つの部屋があった。どちらも畳敷きだが、カーペット

を敷いて事務所風に使っている。左の六畳間が社長の越川と、その腹心の部下である鉄本の机がある部屋。そして右の八畳間の中には机が三つあり、そのうちのひとつはグラフィック・デザインをするための製図用デスクのようなものだった。こっちの部屋を使っているのがどういう人間かということは、いずれおいおいに語っていくことにしよう。

とにかく、平岡義彦は株式会社フィールドに出社した。

リビングルームの、玄関ドアに一番近いデスクに面してすわっていた竹内迪恵が、おはよう、と声をかけてくれた。

2

四月十日から義彦はフィールドの社員ということになったのだが、三月末日の時点では、自分がそんなところで働くことになるとは夢にも思っていなかった。運命の糸に操られるように、という表現は便利すぎるなあ、どんな人生だってそう言えるじゃないか、つまりまあ自分でも理由がよくわからないまま不思議ななりゆきで、そこの社員になってしまったのだ。

平岡義彦は愛知県名古屋市の出身である。県下の教育大学をこの春卒業した。一年浪人しているから、今現在二十三歳である。

その大学の卒業生のほとんどが（当時は）愛知県下の教員になるのが普通だったのに、義彦は

自らその進路を捨てた。そして彼は、何が何でも東京へ出て働かなくちゃいけない、と堅く決心をしていたのであった。

なぜかというと、彼は将来小説家になりたいという夢を、コケの一念のように持っている男だったのだ。とりあえずはSF作家がいいかな、なんて思っている。そして夢を実現させるには、少なくとも夢に向かって前進するためには、名古屋で小学校の先生をやっていちゃダメで、どんなことをしてでも東京へ出て働かなければならないと思っていた。

そこのところ、よく考えてみると、わからない理論である。学校の先生っていうのは、他のサラリーマンよりは自由な時間がありそうで、作家志望者向きの職業のようにも思えるのにねえ。名古屋にいたって小説はもちろん書けるわけだし。

でも、義彦はそのように思い決めてしまったのだ。絶対に東京に出なくちゃ、と。

ところが、就職活動でつまずいた。いくつか受験した東京にある出版社の就職試験に、全部落ちてしまったのである。

大学を卒業してしまい、もう三月も終わりそうだという時に、義彦の身の振り方はまだ決まっていなかった。

そこに登場したのが、東京（実は埼玉）にいる母方の叔父さん、という人物だった。その叔父さんは中小企業振興会の出先機関のひとつのメディア・サービスなんとやら、という、何をしてるのか見当もつかないところで働いているのだが、とにかくその人が義彦の消息を伝えきいて、

就職先を世話してくれたのである。
四月三日に上京し、なじみの薄い叔父と二人で、フィールドの越川直人社長と喫茶店で面談をした。二人は越川が広告屋時代に、仕事を通じて知り合った仲なのだそうだ。
「人を探しているってきいたものだから」
「ええ確かに、文章の書ける人がほしいというのは事実なんですが」
「文章書くほうは、一応できるんだよね」
叔父は義彦のほうを見てそう言った。
「はい。大学の四年間、ずっと同人雑誌活動をしてきましたので」
越川はためらっている様子に見えた。義彦は、これだけが望みの綱だという気になり、しきりに頭を下げた。
「広告製作のほうはもうやらないの」
叔父は越川にそんなことをきいたりした。
「頼まれれば、それもやらないわけじゃないんですけど、それよりも当初の目的通り、情報サービスのほうを中心にしていきたいと思ってるんです」
越川はそう答えた。まだ若くて、人生への野心に燃えている印象の人間であった。この時三十一歳なのである。
情報サービスというのは、具体的にどんな仕事なんだろう、と義彦は思った。同じ疑問を持っ

たらしく、叔父が尋ねた。越川はこんなふうに答えた。
「とりあえず会社を、若者研究所だということにして世間にアピールしていこうと考えているんですよ。このところ、フーテンだとか、ヒッピーのような若者が出てきたり、文化的にもアングラ劇団とかいろいろ若い人の新しい動きが出てきていますよね。ミニコミ誌が盛んに発行されたり。どうも七〇年代っていうのは、そういう新しい若者が時代をリードしていくような気がするんです。だから、企業側としてもそういう、若者の新しい動きを研究する必要がありますよ。それで、その研究をうちが代行しよう、というわけです」
なるほど、若者研究所か、と義彦は思った。
それで、正当に判断すれば、名古屋でひたすら創作三昧の青春を送っていた彼としては、ぼくには不向きな仕事だな、と感じるのが当然なわけである。『平凡パンチ』にもVANにもあまり目を向けないむさくるしい青年だったのだから。
ところが、そういうふうに風俗を研究するような仕事ならば、ぼくに向いてるかもしれないな、とこの時思ったのだから、世間知らずというのはこわい。
「具体的には、若者研究を柱にした、『フィールド・レポート』という情報新聞を月一回発行して、各種企業の企画部とか、宣伝部などに購読してもらうわけです。それがまあ、最初のつきあいの糸口になればいいという考え方ですね。次の段階としては、いくつかの会社からもっと突っこんだ研究の依頼を受けて、個別に調査・研究をやるという……」

「なるほど。いわゆる調査会社というのとは少し違うんだね」
「ええ。消費者アンケートをとったりする、あのデータ業とは分けていきたいんです。もちろん必要とあればアンケートもとりますけど、あくまで若者研究というのが柱で。こっちの持ってる情報を、企業に評価されて買ってもらう、といういき方にしたいんですよ」
実を言うと、七〇年代初頭のこの時期に、価値あるトレンド分析情報（という言葉はまだなかった）は、企業がお金を出して買うはずだ、と考えた越川の先見の明は大したものである。まだまだ一般には、形のない〝情報〟という商品がお金で売り買いすべきものだという概念は薄かったのに。
ところで、義彦としては、仕事は何でもいいから東京に生活の基盤を持ちたいと焦っていた。
「文学系の青年だから、セールスのようなことがうまいタイプではないかもしれないけど」
と叔父が言うと、そんなマイナスの要素を言わなくてもいいじゃないか、と思ったくらいである。
「そういう人材を求めているのではないから、それは問題ないんですけどね」
と、越川は言った。だが、まだ何かためらっているようであった。
結局、次の日に、今度は叔父抜きで越川と会った。そしてその時越川は、こういうことを言ったのである。
「実は、会社が今、あまり楽な状態ではないんで、並よりは少し低い給料しか出せないんだよね。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor